はぐれメタルの能力を貰った男がこいしに憑依(仮)

ディア

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

古明地こいしは貧弱だった。だがその貧弱さが女神から貰った特典（はぐれメタルの能力）が原因だと知り、こいしは貧弱さを克服するために旅に出る

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 11
第3話 …… 21
第4話 …… 28
第5話 …… 33
第6話 …… 40

第1話

覚妖怪。第三の眼（サード・アイ）を持つ種族で、その眼に覗かれた者は考えていることが読み取られてトラウマを引き起こされてしまう。それが私達覚妖怪の評価。

しかし私、古明地こいしは覚妖怪のくせして心も読めないようなお笑い妖怪だけど私は最初から心が読めないわけじゃなかった。心を読んでも悪口しか聞こえない……そのくせ私におべっかを使う妖怪もいる。それが嫌になって私は第三の眼（サード・アイ）を閉じてしまい心を読むことを止めた。

心が読めない代わりに私は無意識と無意識の間に潜り込む……ようするに誰にも認識されないようにすることが出来るようになった。

これはありがたいことだった。私は生まれつき妖力が鬼の勇儀さんよりも有るお陰で畏怖の目で見られる事があり、おべっかを使われた理由もそれにある。

しかし私の新しい力はまだ未完全で妖怪の山を散策している最中に見つかることもあるけれど逃げ足に関しては何故か天狗よりも速く移動が出来るため捕まったことはない。

これだけ聞けば私が凄い妖怪のように聞こえるがとんでもない。私はとにかく身体

が脆く、風邪を引いただけでも相当体力を削られる。だから病気とか毒とかは私にとって天敵なのは違いないわ。

「ゴホッゲホッ！」

だからといってフラグが立つわけでもなく世の中はそうはうまくいかない。お姉ちゃんの覗く顔を見ながら私は鼻水を垂れ流す。

「ほらこいし。これで鼻拭きなさい」

そう言って私の鼻に布を優しく当ててくれるのは私のお姉ちゃんこと古明地さとり。私と血が繋がった姉妹の覚妖怪。今の私とは違って心を読む事が出来、世間でいう覚妖怪と言えばお姉ちゃんのことを指す。

「ありがとうお姉ちゃん」

「いいのよ。それよりも身体を休めて安静にしてなさい」

「うん」

お姉ちゃんの言葉を聞いて眼を閉じ、耳を澄ませるとかつて心を読んだ時のような景色が私の頭の中へと入っていく。しかしこれはまるで自分が経験している……そんな妙な感覚だった。

★★★★

それはまるで自分が経験したことのない感覚だった。寝苦しいのに身体は冷たい。

そんな妙な感覚だ。ゆっくりと目を開けると女の姿がそこにあった。
「あ、起きましたか？」
俺に対して女が微笑むと、俺はその場から起きて冷静に今の状況を考える。
Ｑ１．俺は誰？
Ａ１．古石誠人、ゲーオタ混じった普通の高校生
Ｑ２．目の前の女は誰？
Ａ２．知るか。どうでもいい。初対面であるのは確か。
Ｑ３．ここはどこ？
Ａ３．わからんから目の前にいる女に聞く。
「ここはどこだ？」
「その前に貴方に謝罪させなければいけません……申し訳ありませんでした！」
「……はぁ？」
何言っているんだ？　こいつと声を出しそうになったが周りを見てみると真っ白けっけな空間であるのがわかる。……監禁された可能性があるが俺は普通の高校生だ。まず監禁するメリットがほとんどないし、謝ったのも理由にならない。
「……俺の状況は一体何なんだ？　何が起こっている？」
「それは私が謝罪した理由にも繋がります」

　そしてこの女が口を開き、状況を説明し始めた。
「私が謝罪している理由……それは女神である私がとあるミスをしてしまい、本来死なないはずの貴方が死んでしまった……という事態になってしまったということです」
「……俺死んだのか？」
「はい。飛行機に乗っていた貴方は飛行機事故によって死にました。蘇生しようと試みましたが事故の影響で貴方の身体がぐじゃぐじゃになってしまい、蘇生することすらままなりませんでした」
　飛行機事故？　そういえば修学旅行で沖縄から帰る途中だったんだ。
「マジでか。どんなミスをしたんだ……？」
「そ、それは……」
「それは？」
「貴方の隣にいた同級生がいたでしょう？　その人は心臓麻痺で死ぬはずでした。しかしいつまで経っても死なずこのままでは地獄行きになりかねないのでその人だけが死ぬように飛行機事故を起こして天国へ行かせようとしたところ……」
「間違って俺を殺したと」
「はい。申し訳ありません」
「しかしわからねえな。俺を間違って殺したなら黙ってそのまま天に還させれば問題な

いんじゃないのか?」

普通ならそう考えるはずだ。そうでもしなければ俺が怒って激情し、掴みかかるなんてこともあり得たはずだ。

それはともかくいつかはわからないが俺の中学の時の先輩の先輩の先輩あたる人が大学に必要な単位も卒論も提出したのに大学のミスで卒業出来ずに泣き寝入りさせられかけたって聞いたことがある。結局裁判して大学を卒業したみたいだけどな。……ようするに証拠隠滅に走るのが良いってことだよ。

「そういう訳にもいきません。天国と地獄、いずれかへ行くにはきちんと生をやり遂げなければなりません。つまり貴方の状況は天国にも地獄にもいけない状態なのです」

つまり俺は消滅出来ないってことか? ……俺はゲーオタだが別にそこまで人生に執着している訳ではない。ゲーオタ関係ないか。俺としてはこの女神が「やっちまったもんは仕方ない」と考えていて謝罪も一応して貰った。それだけで十分だ。だがこの消滅出来ないとなると話は別だ。俺だけでなくこの女神にも迷惑がかかる。俺を死なせたという弱みを利用して貸借りなしなんてのは俺の主義じゃねえ。

「……そのままだとどうなる?」

「それは……わかりません」

「わからない?」

「ええ。私は下っ端なのでそういった情報は与えられていません。ですが推測はできます。天国にも地獄にもいけないというからには貴方は怨霊として永遠に苦しみ続けることになるでしょう」
「それは嫌だな」
　毎日労働もキツいがそれ以上に嫌なのは暇で退屈な日々を過ごす……刺激を求めるゲーマーとしては致命傷以外の何物でもない。
「それを避ける手段として貴方はもう一度生き、生をやり遂げなければなりません」
「……つまりラノベでいう転生って奴か？」
　俺はラノベなんてものはそんなに見ないと思うが一応知識はある。俺の身体がぐじゃぐじゃになっているというセリフから元の世界に戻るのは無理。となれば「異世界転生」に絞られる。
「概ねそんな認識であっています。本来なら転生する際に特典……所謂チートは与えないのですが死ぬはずでなかった貴方を死なせてしまったお詫びに一つだけ要望を叶えましょう」
　一つだけか……友達に異世界転生物と言ったら大体ファンタジーが多いって聞いたことあるしファンタジーにはファンタジーだな。最強キャラでも悪くないよな。でもそうするとすぐに飽きてしまって楽しめないよな。となれば敢えて縛りプレイにして

みるのも良いよな。
「はぐれメタルの能力をくれ」
はぐれメタル。ドラクエシリーズに出てくる雑魚キャラだ。
こいつはＨＰこそカスみたいなもんだが貰える経験値が高いのでみんな狩ろうとする。しかし身の守りが高くプレイヤーが与えられるダメージもほぼ1か0。しかも呪文の耐性があり魔法では倒せない。それだけならまだ良いが身の守りと同じくらいの数値の素早さで逃げてしまい経験値を獲得できない。
しかし味方になれば頼もしい存在であるのは違いない。はぐれメタルのもう一つの特徴はＭＰが多いことだ。つまり数多くの技を引き出し、使える。昔の俺も良くはぐれメタルを使っていた……
「は、はぐれメタルですか？」
女神が戸惑う理由は一つ。何故はぐれメタルなのかということだ。はぐれメタルの特徴を持つメタル系の雑魚キャラはいる。むしろはぐれメタルの上位互換の方が多いくらいだ。だからはぐれメタルは使われなくなった。
「縛りプレイって奴だ。どうせ最初から最強キャラになってもつまらないしな」
「変わっていますね……後で変更できませんよ？」
「構わねえよ。これが俺の選んだ道だ」

「……そこまで言うなら止めません。しかし記憶はどうします？　赤ん坊の頃からあるのはちょっとした恥辱プレイですよ？」
「恥辱プレイってやらねえよ！　しばらくしたら記憶が戻るようにしてくれ！」
「では二度目の生をやり遂げてくださいね」
俺の立っていた所に穴が開き、その重量に従い落ちた……
☆☆☆
そして私（俺）は心を読めない覚妖怪、古明地こいしとなっていた。
この表現は正しくないね。私は古明地こいしとして生まれ、こいしの人格を形成している。前世の私こと古石の記憶を思い出したにしか過ぎないから記憶継承とかそんな感じ？
あの女神がはぐれメタルじゃなく覚妖怪それも他者の心を読むのが嫌になって第三の眼（サード・アイ）を閉じた私に転生させたのかはわからない。……前世の私、古石でいいや。古石の頃に「はぐれメタルにしてほしい」なんて言ってなかったけど空気読もうよ！　全然関係ないじゃん！　覚妖怪とはぐれメタル、一文字もかすってない。古石って名字と私の名前のこいしなら大ヒットホームランなんだけどね。
しかしよくよく考えれば何故私が風邪にかかっただけでも死にかけたのかわかったよ……だってＨＰが一桁だよ!?　ダメージ１受けるだけでも１割以上のＨＰが削られ

るって結構ありえナッシング!!　風邪をひいて寝込むのも無理ないわ。初期の主人公ですら３０くらいはあるのに……

鍛えればどうにかなるかもしれないけど肝心の経験値ってどうやって手に入るんだろう……やっぱり妖怪を倒せばいいのかな？　それとも人間？　何にしてもこの糞（ファッキン）ＨＰを改善しないと殺されそう。

この世界は古石の記憶によると私やお姉ちゃんを始めとした妖怪達が登場する『東方ｐｒｏｊｅｃｔ』というシューティングゲームの舞台の世界で主人公の博麗霊夢や霧雨魔理沙を始めいろんなキャラクターが幻想郷に住んで異変を解決するストーリー。古石は修学旅行から帰る時に初めて東方シリーズをプレイをする予定だったみたいだけどあの女神が古石を殺したことで知識もチグハグなもの。

その知識から得られた幻想郷のイメージは……『物騒』。この一言に尽きる。

幻想郷にスペルカードルールが導入される前は殺し合いで解決するのが主流で多くの血が流れている。つまり糞（ファッキン）ＨＰの持ち主である私が逃げ切れず、それに巻き込まれたら間違いなく死ぬ。そうなる前にレベルアップして鍛えるしかない。幸いなことにはぐれメタルの能力を貰ったんだからレベルアップくらいは出来るはず……そう信じたい。

風邪が治ったら、すぐにでも経験値を稼いで強くなろう。その為には……

「とりあえず寝よう」

風邪を治してからだね！　何事も健康でなければ話にならないし。

明日から本気出す……なんだかニートみたいな宣言だね。

第2話

翌朝……お姉ちゃんに相談してみた。

「……という訳でお姉ちゃん！　私外行きたい！」

「ダメよ」

「なんでや！」

思わずノリで関西弁を使って返すとお姉ちゃんがため息を吐いた。……幸せ逃げちゃうよ？

「だってこいし、あなたよく病気になるでしょう？　そんな時に私がいなかったらどうなるかわかっているのかしら？」

「うぐっ!?　全くその通り……」

ジト目のお姉ちゃんの言うことは正しく、私は狼狽えた。

「でも私が貧弱なのは体力不足が原因なんじゃないかな……って思ったり」

それでも諦めずに提案するあたり古石の頃の経験が活かされていると感じるな。

「体力不足を克服するために力尽きて死にましたなんてなったらどうするの？」

実際にありそう。体力鍛える為にマラソンした結果、熱中症でぶっ倒れるのと同じよ

うな感じで倒れてそう。むしろそうなんじゃない？

「それにどんなに妖力が多くても貧弱じゃどうしようもないのよ？　勇儀さんのように強く勇ましくないと」

強く勇ましくかぁ。少なくとも私の小四ロリ―はネタにしてもかなり小さい身体であることには違いない―の華奢な身体とは縁遠い話だよね。勇儀さんを知っている理由は私達姉妹と勇儀さんの仲が良い、という理由じゃない。私達が有名人である勇儀さんを一方的に知っているだけなんだよね。私達覚の種族は有名だけど個人としてはまだ無名。有名になるのはまだまだ先の話。

……私が勇儀さんよりも妖力が多いと思っているのは古石の記憶の中のはぐれメタルのＭＰの多さから予測したにすぎないから本当のことを言うとわからない。

「それならお姉ちゃん、弾幕ごっこで決着をつけようよ！」

弾幕ごっこ。幻想郷に置いて揉め事があった時、それを使うことが推奨されている。

……幻想郷の決闘みたいなもので、パクった。

「弾幕ごっこ？」

お姉ちゃんがそう首を傾げて訪ねてきた。

そう言えば今はまだスペルカードルールが設立されるどころか勇儀さんがまだ山の四天王って呼ばれていた頃。

なのでまず竹取翁に出てくる藤原不比等（もこたんのおとーさん）が存命している時代でないことは確か。もう輝夜姫の話は妖怪の方でも噂になっていてとっくに月からの使者云々の話も聞いている。

勇儀さんやヤマメは源雷光、じゃなかった。源頼光によって倒されるから今は１１世紀よりも前でスペルカードルール創設者の霊夢は２０世紀に誕生。生まれてすらいない。つまり弾幕ごっこはパクっても問題ナッシング！

「そうだよー。弾幕ごっこ。基本的に弾幕を打ち合う遊び。誰でも勝ち負けが出来るように規則（ルール）があるから戦闘が得意じゃないお姉ちゃんでも勝てるよ！」

「そうなの？」

「そーだよ。基本的に弾幕に当てたら勝ち。だけど必ず弾幕に抜け道を作ること。この二つが規則（ルール）だけど質問ある？」

幻想郷の弾幕ごっこは美しさを求めたり、殺し合いはしないとかいくつかルールが追加されるみたいだけどあんまり複雑にしてもお姉ちゃんが不審に思うだけだし大分端折った。

……本当のことをいうと所詮原作、つまり東方シリーズ未プレイかつ設定だけの古石の記憶からパクったものをシンプルにしただけなんだけど。

「……なるほど。こいしのような膨大な妖力の持ち主が相手でも抜け道があると知って

いれば勝てる可能性も上がる。まだまだ改良が必要そうだけど一通りやりましょうか」
「それじゃ行っくよーー！」
私とお姉ちゃん、互いに譲れない戦いが始まった。
私の弾幕は決してパワーがあるわけではない。だけどその分緩急をつけたりするテクニックや大量に弾幕を出すことは得意。つまり弾幕ごっこの勝負の流れを有利に運べるってこと。パワーは相手の弾幕を打ち消してそのまま直進する力になるけれどそれを武器に出来るのは（レベルとかが）格上の相手くらいのもの。同じ相手じゃ打ち消すことよりも如何にして相手に当てられるかを考えなきゃいけない。
「わ、わわっ!?　私は初心者なんだ、から！　もっ……と手加減しなさい！」
お姉ちゃんは私の弾幕に戸惑いながら避け、器用に私の弾幕の隙間から弾幕を放っている。けれど私の弾幕に打ち消されてしまい、弾幕を多く出せる私の方が優勢になっていた。
「やだよー」
べーー！　と舌を出して挑発するとお姉ちゃんが顔を赤くし、冷静さを失った。
「もおぉぉっ!!」
牛のように叫んでやけっぱちで弾幕を出しても私の方が多い……まあそうだよね。
私ははぐれメタルのＭＰと同じ分の妖力を扱えるのにお姉ちゃんは所詮一介のモンス

ター程度。文字どおり桁が違う。
　加えて私の『無意識を操る程度の能力』はお姉ちゃんの『心を読む程度の能力』よりも強く、私の心の中身を読むことはできない。
「ちょっ!?　こいし!?　手を出すのは反則よ!」
「反則じゃないよー。だって手を出しちゃ駄目なんて言ってないし。それに手に当たっても弾幕じゃないから当たっても問題ないよ」
　……ようするに考えるよりも手を先に出すから心を読もうとも読めないってことなんだけど。古石の記憶を継承しても私は私らしく自由奔放。勝手に身体が動いてお姉ちゃんに近づいている。
「くっ、こうなったら……!」
　お姉ちゃんがエロ同人みたいに第三の目（サード・アイ）の触手が私を束縛した。
「うわぉっ!?」
「さ、これで終わりよ」
　お姉ちゃんが余裕を持ったのか元のジト目に戻り、弾幕を作り出したその一瞬、触手が緩んだ隙を見逃さない。
「残念!　大魔王からは逃げられないけれど覚妖怪からは逃げられる!」
　シリーズの中にははぐれメタルには逃げ足という特性があり、例え大魔王であっても

逃げられるけれど古石の記憶によるとあくまで貰ったのははぐれメタルの能力でしかない。じゃあなんで出来たかっていうとお姉ちゃんの隙を見てはぐれメタルの素早さで解いただけ。簡単でしょ？

「ちょいさーっ！」

そしてお姉ちゃんに弾幕を当てた。

ピチューン！　パラッパッパー！

私の頭の中にそんな音が響いた……これってレベルアップ？脳内でレベルアップの音声が聞こえた件について考えないと。でも今までの私だとすぐに忘れそう……そうだ！　古石の考え方で行こうよ！

Ｑ１．レベルアップした？

Ａ１．多分レベルアップした。

Ｑ２．何故？

Ａ２．お姉ちゃんを弾幕ごっこで負かしたことによる経験値獲得。レベルアップした確証は身体が軽くなった気がするから。

Ｑ３．これからレベルアップするには何をしたらいい？

Ａ３．弾幕ごっこで勝利することやＤＱの王道通り妖怪（モンスター）を倒すこと。それで獲得出来なければ他の方法も検討する。

うん……だいぶ整理出来た。古石の考え方って結構冷静に考えられるから結構好きなんだよね～。今までの考え方だったら飽きて思考放置しちゃうから……

「じゃあ、お姉ちゃん。お外行ってくるね～。いつか戻るから！」

私はお姉ちゃんが反論しないように早口まくりでそう言うとお姉ちゃんが万一捕まえようとした時の保障として気配を薄くして少し離れた。

「……こいし、気をつけて行ってくるのよ」

お姉ちゃんが淋しそうに優しく私の外出を許可した。

「それじゃ、行ってきます」

私は古石の頃のように外へと飛び出した。

～小四ロリ移動中～

そう言えば今年って西暦に換算すると何年くらいなんだろ？

輝夜姫の話は終わっていることから８世紀よりも後なのは確か。でも勇儀さんが健在しているので１１世紀よりも前だからまとめると……今は西暦７００～９９９年くらい？　元号は大化と明治、大正、昭和、平成しかわからないから人物で判断しざるをえない事態に前世の私こと古石に怒りを覚える。

「ベギラゴン！」

シーン……

やっぱり何も起きなかった。やばい、これめっちゃ恥ずい……古石が小学生の頃、宿泊学習で誰もいないところでかめはめ波を練習してたら友達に見られた時くらい恥ずかしい。

怒って感情を高ぶらせれば妖力も高まり、呪文も唱えることが出来るはず！　……なんて考えていたんだけど失敗した時のリスク考えてなかった私は⑨

「イオナズン！」

シーン……

またしても何も起きない。諦めずに呪文を唱えるあたり無意識の力が暴走している……やっている私は土竜の如く墓穴を掘っている。

「ベギラマ！」

シーン……

もう止めて私のライフはゼロよ！　第三者が見た目幼女が涙目になるまで頑張っている姿を見たら応援したくなると思うかもしれないけど、本人からしたら恥ずかしくて死ねる。唯一の救いは私が無意識状態であることで誰にも見られないこと……

「何大声あげてんだ？お前？」

後ろから声をかけられ、そっちへ振り向くと、そこにいたのは白い髪に数多くのリボン。赤モンペとアルビノのような白い肌と赤い目。何処か彼女は荒々しくもあり凛々

しくもあった。私はその人を知っている。
「……どちら様で？」
先ほどの恥ずかしさからの現実逃避とお姉ちゃん以外の原作キャラに会えたことによる嬉しさが合わさってそう尋ねると彼女は口を開いた。
「私か？　私は……妹紅だ」
東方シリーズの原作キャラの一人である藤原妹紅。東方シリーズにおける炎の使い手……通称もこたんで愛される彼女とこんな形で会うとは思わなかったわ……
「私の自己紹介も終えたことだし、質問に答えてもらうよ。お前は何をしていたんだ？」
「え？　え～と……」
「なんだ？何かやましいことでもあるのか？　え？」
もこたんの目が据わり、ヤクザそのものの目つきに変わって私に詰め寄る。
「その前に一ついい？」
もこたんが怖くて泣きたい。だけどそれ以上に、どうしても聞かなきゃいけないことがある。
「あん？」
「いつから見てたの……？」
「ベギラゴンってところから」

……終わった。ほとんど最初から覗かれてた。唯一の救いも能力が別の方向で使われてたら意味がないよ……死にたい……

「おい魂出かけているぞ！　しっかりしろ！」

魂が出かけている？そんなのどうでもいいじゃない……へへへ……

それから数刻、私が立ち直るのに時間を要した。

第3話

もこたんに慰められ、立ち直り自己紹介しあうといたって何でもない会話をしていた。

「妹紅の頬っぺたフニフニしてて癖になりそう」

「くすぐったいよ」

……会話と書いて、戯れると読む。それが私達のコミュニケーション。いやマジにもこたんの頬っぺたがおっぱいのような柔らかさで触ると気持ちいい。肌はカサカサだけどね。

お姉ちゃんはインドア派――半分は私のせいだけど――なお陰で肌は白いけど運動もしていないから少食で脂肪も取れないから頬っぺたがもこたんほど柔らかくない。……私？私は食事をしても病弱だったからインドア・アウトドア以前の問題。ある程度筋肉とかついていて何も食べられないって訳じゃないけどおっぱいがない。病弱は悲しいっ！

「うりゃ！　そういうお前はどうなんだ？」

「ひゃんっ！」

「あはは、変な声！　ほらほらさっきまでの勢いはどうした？　ん？」
形成逆転！　もこたんにサヨナラツーランホームランされてしまった私はされるがままになった。
～少女百合中～
「あー楽しかった。いやぁ、ここまで楽しいのはこうなってから初めてだ……」
すっきりした笑顔でもこたんが額の汗を拭き取ると私は原作を知っているということを感じさせない為に質問した。
「こうなったって……何がどうなったの？」
「ああ、私は見かけこそこんなんだけど元々は人間だったんだ」
「人間？　嘘だ～。だって妹紅、私と遊んでくれたじゃん。普通そのくらいの歳の人間だったら私の姿を見たら逃げるか退治するかのどれかだよ？」
実際はエロ同人が１０冊作れるくらいナニを考えているダメ人間、特に貴族が多く、変態文化ここに極まりと言った感じだった。
「そりゃお前が何かしたっていうなら退治しなきゃいけないけど、お前はまだ何にもしてないだろ？あえて言うなら奇声を上げたくらいでそれも初めてだし被害もへったくれもない」
うわお、元貴族とは思えないくらい常識人！　こんな人が増えてくれれば良いのに。

「でも私は覚妖怪だよ？　秘密にしている事も分かっちゃうんだよ？」
「本当にわかっているなら私の事は聞かなくても良いはずだ。なのにこいし、お前は尋ねた。ということはお前が心を読むには何らかの制限がかかっている。違うか？」
　中々頭の回転も良い。覚と聞くだけでもパニックになって距離を取る。それが普通で、もこたんのように冷静でいられるケースは滅多にない。現代人の古石ならそのくらいはやれるとは思うけどもこたんは時代が時代だから凝り固まった知識しかないはず。この時代の人間であれば間違いなく頭の柔らかさは1番なんじゃない？
「半分は正解」
　もこたんほどの頭なら私を受け入れてくれるかもしれない。だけどその一方で私を受け入れてくれなかったら？という考えが過ぎり、覚妖怪でも心が読めないということを話すことにした。
「半分？　何がどう違っていたんだ？」
「制限云々以前に私は人や妖怪の考えることが嫌になって心が読むことを止めちゃったの。今の私は心の読めない覚妖怪、つまり妖力を持った普通の人間みたいなものよ」
　その妖力の量は普通の妖怪どころか大妖怪すらも凌ぐ程だけど。
「なら私よりも人間らしいじゃないか。私は今から数百年ほど前、不老不死の薬を飲んでからというもののこんなナリになって化物扱いされたさ。まあ当然かもな……白い

肌と髪に赤い瞳、そして何よりも死なない。こんなのは人間とは呼べない。ただの化物だよ」

　もこたん、いや妹紅は自虐気味にそう語り苦笑した。

「なんだかおばあちゃんみたいだね」

「おば!?　お前なぁ。確かに私は何百年も生きているけど心はピッチピチの少女だぞ？」

「でも化物扱いよりかマシじゃない？」

「人間としてはそうなんだが女を捨てていないからな。化物扱いされてもこれだけは譲れないよ」

「冗談よ。だって私が見える時点で心が子供だもん」

「どういうことだ？」

「私は心が読めなくなったけどその代わりに無意識を操る能力を手に入れたの」

「無意識？」

「んー例えばさ、妹紅はそこらへんにある石ころの形を覚えられる？」

「ん？　ああ、それがどうした？」

「もし私が何も言わなかったらそこにある石ころの形なんて覚えてないでしょ？」

「そりゃそうだ。いちいち覚えるまでもないからな」

「私はその石ころみたいに存在感を薄くすることが出来るの」
「へえ、それじゃ空き巣や食い逃げし放題だな！」
やっぱりもこたん、頭の回転は速いみたい。私の言葉でどんなことをやれるかというのを理解できる。
「そんなことしないよ!?」
「まあそれはともかくだ。それと私の心が子供っていうのはどういうことなんだ？」
「あ～……説明長くなるよ？　大人はその単語が出てきたら長い間放置しても思い浮かべられる。だけど子供はずっと覚えられる代わりにそれが出来ない……つまり子供達は私の能力の対象にならないから私のことが認識出来るってわけ」
この説明は心理学の話。心理学では意識は短期記憶――単語などの暗記に使われる記憶――によるものだとされている。長期記憶――人の顔や名前など連想して覚える記憶――は無意識とされている。つまり私は相手に長期記憶を刺激させない状態にあるから某ネコ型ロボットに出てくる石ころ帽子のような働きをする。
ところが子供はその長期記憶が発達していない。その代わりに短期記憶をフルに働かせているから私のことを常に認識しているって訳。
もっともこんな時代に短期記憶がどうのと言っても知恵熱を出しかねないので曖昧に説明した。

「子供が能力の対象にならない……」
「だから私を認識している妹紅は純粋な子供って言えるんだよ」
　そう言って私が立ち上がり、埃を払うともこたんの口が開いた。
「あ～ちょっと待て。もしかしてこのまま行く気か？」
「そうだよ？」
「お前、そのまま行って大丈夫なのか？私のように子供の心を持った奴に会って戦うことになったらどうするんだ？」
「その時は逃げるよ。こう見えて逃げ足が速いから」
　はぐれメタル万歳！はぐれメタルって逃げ足の速さなら誰にも負けないからロマンとも言える。
「どんなに逃げ足で逃げても逃げられない時は？戦うしかない状況になった時はどうするんだ？」
「弾幕張ってさっさと逃げるよ」
「さっき言っていた部技（ベギ）なんとかや生男（イオ）なんとかの習得はしなくていいのか？」
　何故だろう……なんかものすごく卑猥に聞こえる。
「あれはちょっとね……」
　よくよく考えてみたらベギラゴンやイオナズンはいくらはぐれメタルと言えども高

レベルにならないと習得できない。今の私はステータスに関する能力（身体能力や魔力など）がはぐれメタルの能力に合わせてカンストしているだけで他はレベル1と大差ない状態。だから高レベルで覚えるはずのベギラゴンやイオナズンは使えなかったって考えられるわ。

「よかったら炎の出し方教えてやろうか？」

意外にも、もこたんが私に師事させるように提案してきた。この時のもこたんは荒れてたと思ったんだけど既に心の傷って癒されていたのかな？

……それはないよね。古石の記憶だともこたんとぐーやは未来でも殺しあっているから憎しみが消えたなんてことはない。

「いいの？」

「このまま別れてこいしが殺されたら嫌だしな。それに身につけておいて損はないだろ？」

確かにもこたん以外の人に私の正体が覚なんてバレたら殺されかねない。しかも心を読む力のない覚は人妖問わず格好の獲物でしかない。

「それじゃお言葉に甘えて……優しくしてね？」

それから炎の出し方を教わり、ライターの火程度の炎を出せるようになった。ＭＭＯのステータスで例えるなら炎レベル1って感じかな？

第４話

「んじゃ、私に出来ることはこのくらいだ。こいし、また会おうな?」
一ヶ月の間、もこたんが私に炎の出し方を指導してくれたおかげでメラミくらいの炎の球を出せるようになった。……え?　その様子を詳しく?　ほとんどその時無意識だったから覚えていないから無理。その無意識のおかげで習得出来たとも言って良いんだけどもね。
「ありがとねー！妹紅ー！」
私ともこたんは手を振りながら別れ、見えなくなると私は手を振るのを止めた。
「それじゃ何しよっかな?」
考えてみるだけでもやるべきことがある。それは原作の登場人物達との接触。
まず始めに接触しなくちゃいけないのはひじりんこと聖白蓮。もこたんが清和天皇が崩御したのを４０年くらい前に耳にしたと言っていたことから、西暦９２１～９２５年だと推測でき、まだ醍醐天皇の時代で白蓮の弟の命蓮が生きている為にひじりんは悲しみに暮れずまだ魔法に手をつけていないので封印されていることもない。つまり、ひじりんと会える可能性はあるってことよ。ヨボヨボのおばあちゃんだけれども。地底

に封印されないのでここで会わないと１１００年後の幻想郷で待たなくちゃいけない。何せひじりんは「１０００年以上も（星達の）力になってあげられなかった」と発言していることから１０００年前から封印されていることになる。もっともぬえっちこと封獣ぬえが面識があるようなセリフを言っていたのとどこかの資料で８００年前に封印されたことが紹介されてあったから８００年封印説もあるんだけどね。むしろひじりんの性格を考えるならこっちの方が有力なんだよね。結構悔やむような性格だし。

次に星熊勇儀こと勇儀さん。源頼光が鬼退治をする前だから接触は可能。……だけど無理して会う必要もないかな？　無理に会えば天狗達とか勇儀さんにボコボコにされそうな上に、死ぬ可能性だってあるんだよ。それに同じ地底に封印されるんだし態々今会いに行ってもメリットよりもデメリットの方が大きい。

他にも会いたいのはいるけれどとりあえず近年のはこんな感じかな？　それ以降となると２００年くらい待たなくちゃいけないから、その時に考えよっと。

「という訳で東大寺に着きました～！」

イエーッ！　などという叫び声がこだまするけれど無意識にやってしまったものだから誰もそれに気づかない。

「叫び声がこだまする？　なんか忘れているような気がするけどまあいっか」

覚えていないことだからそんなに気にする必要もないでしょ。無理に思い出そうと

しても思い出せるものじゃないからそういう時は諦めるしかない。
「それじゃ早速聞き込みスタート！」
　こう見えても私は妖怪だから聞き込みをしようにも出来ない。むしろこの場にいる全員が殺しにくるよね！　そんなわけで無意識を操る程度の能力で聞き込み調査をするしかナッシング！　こんな方法でしか聞き込み調査出来ないって嫌な世の中よね！
「命蓮様か？　それだったら信濃に向かわれたぞ」
「なんだ……と？」
「確か姉の尼公と会いに行くとかそんな噂を聞いたな」
　ｍｊｓｋ。ということは命蓮は今長野県にいる？　入れ違いになったとしても行くだけの価値はあるんじゃないのかな？　私達の御先祖様って美濃、つまり岐阜県出身らしいし、そのお参りついでなら問題ないよね？　他にもあの神様達も長野県にいるしついでに行こうか。
「音速の末脚が炸裂する！」
　一度は言ってみたかったセリフをそう絶叫するも、風を切る音がうっさくて私の声に誰も気づかない。気づいたとしても移動するのが速すぎて私の姿は見える訳はないんだよね。はぐれメタルの能力を持っているというだけあって素早さがとんでもない数値になっているからマッハくらいは行っているんじゃないの？　と思えるくらいに速

く飛べる。

何でマッハかというとマッハ１≒１２２５ｋｍ／ｈで、ＤＱＭＪ２のはぐれメタルの素早さのステータス限界値は１３００だった気がする。素早さのステータスは各々が出せる時速と考えている。つまり素早さが１０だとするなら１０ｋｍ／ｈで走れるという風に捉えている。レベル１の時の人間達のステータスがそのくらいだからそう推測しているだけで実際の速度はもっと遅いのかもしれないし、何よりもレベルが低すぎるからそんなに行ってないんだけどもね。私の推測が正しかったら正しかったでドラクエ世界の住民が如何に異常かわかるよね。もしその住民達が普通の覚妖怪が出会ったとしたら精神攻撃じゃなく物理で駆逐されそうな予感がするもん。

しばらくすると美濃についた。それは良いんだけど、困った。

「おお、こいし様。どうぞこちらへ」

簡単に言うと同族の覚妖怪に歓迎され、宴会に参加することになった。これはこれで困るんだよね。断ろうにもお祖父ちゃんとかそう言った親戚らしい人が「おお、我が孫娘よ！　よくぞ帰ってきてくれた！」なんて豪快に笑って抱きついて感激してきたのに宴会お断りしますなんて言えばどうなるかわかったものじゃない。戦闘になることは当然、私以外の覚が大怪我を負うことは目に見えている。私？　私は覚えたメラミ擬きでこの覚達を撃退するから大丈夫。……多分。

「それでは古明地こいし様がこの地に訪れたことに乾杯！」
「乾杯!!」
　どうしよう。このままじゃ命蓮と会えなくなるのかな？　命蓮と出会えなくなった時のデメリットってひじりんと共感ができなくなるから結構キツイんだよね。一応会えることには会えるけども。
「ガハハ！」
　……とりあえず今日は楽しもう！　それでダメだったら諦めよう！

第5話

「う、うーん？」

あれから何があったんだっけ？　お酒を飲んで、宴会がお開きになって、そのまま寝ちゃった？　だとしたら大の字で寝ても仕方ないよね。

「おしっこ……」

おしっこ行きたくなるのは仕方ない。まず目が覚めたらおしっこをするのは当たり前だけど、その前にお酒一杯飲んじゃったから必然的に膀胱に水分も溜まっておしっこもしたくなる。むしろおもらししなかっただけありがたいくらい。

「うっ!?」

ヤバイヤバイっ!?

トイレなんてものはこの時代はないから草むらの茂み……あった！　丁度いいところに平野があったのですぐさまパンツを下ろし、しゃがんで《ここから先はこいしちゃんの聖水が流れるシーンですが人身事故が起こり、隙間送りされました。紳士及び淑女の皆様へ隙間送りされたことを深くお詫び申し上げます》……ふう、スッキリした。

「キュルっ！」

立ち上がり、パンツを履こうとすると後ろからメタルスライムに似た何かが現れた。もしかして私のおしっこでメタルスライムが生まれたの？　待って待って。メタルスライムってそんな生まれかたじゃないでしょ!?　モンスターの配合で生まれるのはメタルスライムが両方親じゃないといけないんでしょ!?　しかも両親はいなくなるのに私は生きているし……野小便している時点で女の子として死んでいるけど。

「メラ!」

っと。どうやら私のことを敵だと思っているみたい。でも私ははぐれメタルと同じ能力だから効かないんだよね。それにしても生まれたてのメタルスライムがメラを使えるのはやっぱり生まれながらの素質なのかな？

「たぁーっ!」

爪先の部分でサッカーボールを蹴るようにメタルスライムを蹴ると、会心の一撃が入ったらしくメタルスライムが音もなく消えていく。その場に残ったのはメタルスライムと同じ金属の塊だった。

「戻ろっか」

履き損ねたパンツをしっかりと履いて元の場所に戻った。

「おお、こいし様おはようございます」

「おはようお爺さん」
「ところでこいし様が手にしているその金属の塊、中々良さそうなものですな」
「わかるの？」
「我々覚妖怪は襲撃する商人達の心を読んで荷物にどのくらいの価値があるか判定していますからな。目も肥えるというものです」
　まんまテンプレに出てくる盗賊じゃない？　そんな覚妖怪が多いから嫌われたんだろうね。
「じゃあ、私そろそろ行くね」
「うむ、こいし様。さとり様にも我々は元気でやっていると伝えてくだされ」
「それじゃお爺さんありがとうね」
「お気をつけてこいし様！」
　う～ん……何にもヒントは得られなかったけどとにかくひじりんを探さないと。確か美濃のあたりまで来たんだっけ。今ひじりんは信濃にいる。だいぶ近いけどどうなんだろう。
「聖命蓮？　以前そのような名前聞いたことのある名前だな」
「その人はどこに？」
「さぁ……姉に会いに行くという噂は流れているそうだが、御偉い様のところなんか儂

らには何も関係ねえだ。儂らはただ税を納めればええだよ」

何て無関心&社畜奴隷！　日本人が宗教に無関心でかつ社畜奴隷だったのってこの頃だったのかな？　この時代的はとにかく重税ばかりで娯楽を与えてもやる暇なんてないし、宗教にも手が付けられる訳もない。戦国時代宗教が流行ったのは戦国時代の人が仕事をしようにもどうしようもないから時間が有り余っていたからで今の時代はそうじゃないんだよね。

そんな馬鹿なことを考えながら次に向かう。次に頼るのは守矢の二柱。いや頼っても門前払いさせられるのはわかっているよ？　別の宗教の人の場所に案内するくらいなら自分達の宗教に改宗されるか門前払いさせられることくらいは予想がつくし、時間もかかる。ただあのおじいさんの反応をみる限り他の人もその考えに近いからこの辺の一般人に頼ったところで無駄。京とかそっちの方面なら別だけど。

「それで余のところに来たと？」

参拝客の私に対応しているのは八坂神奈子。日本神話に置ける風神の立ち位置にあたる神様が彼女。史実では男の神として知られているけど目の前にいるのは女。史実におけるこの神様は、私の中ではとにかく影が薄く「あれ、そんなのいたの？」と思えるくらいに影が薄い印象がある。まあ、形がアレな姿で伝えられるもう一柱に比べれば

マシな扱いと言えるけど前世神奈子のモデルが女だと思っていたくらい影が薄い。
「本音を言えば来たくなかったけどね」
　ここに来たくなかった理由は関わる必要がないというよりも「私が第三の眼(腐っ)を閉じても覚妖怪だから心の声を聞いているのではないか」という不安がわかっちゃうんだよね。この感情の読み方は昔の経験と古石の頃の性格かな？
「正直な奴だ」
「覚妖怪だもの。ある程度正直じゃないと意志疎通が面倒で仕方ないよ？」
　実際、覚妖怪同士は心と声を一致させてから話すのが前提だし。
「ふん、まあ良い。その聖姉弟についてだが西の方へ向かったそうだ。我を信仰していない者共から立ち聞きさせてもらった」
　また移動するの？　ひじりんの追っかけなのは良いとしてもだらだらと追いかけたくない。というか立ち聞きって……神様としてそれはどうなの？
「そうだ。せっかくここまで来たのだ。余と祭りをしようではないか」
「祭り？」
「神の遊び……すなわちこういうことだ！」
　その瞬間、神奈子の手から弾幕が飛び放つ。
「不意討ちなんてそんなことをするなんて神様として失格だよ!?」

「我の知る神は引きこもりになったり、大蛇相手に泥酔させて寝込みを襲ったりと情けないものばかりだ。不意討ちなんて神の間では常識の範囲内だ。それにこの程度の攻撃を避けられぬお前ではあるまい。我は知っているぞ。高速で移動出来ることを」

そうだったよ。日本の神様はなんというかそんなのばっかりだった。だからと言って欧州の神様も良く言って人間味溢れる神様ばかり。もしかして神様はこんなのばかりなのかな。

「さあ死合おうぞ」

……ええい。ままよ！　私がポケットに入れておいた金属の塊を投げると物凄い音が響いて神奈子が仰け反った。

「だ、大丈夫？」

「くっ……！　今のはなんだ？」

神奈子が弾幕を放つのを止めて、金属の塊を拾う。そして神妙な顔つきになり私の肩を掴んだ。

「一体これをどこで手に入れた？」

「それが何か問題でもあったの？」

「問題どころか、これは我々神でも滅多に見ることが出来ぬ金属ヒヒイロカネだぞ」

「え？」

何をどう突っ込んだらいいのかわからないよ、この展開!?

第6話

ヒヒイロカネと言えば日本版オリハルコンとも言っていい存在。メタルスライムから出来た金属がヒヒイロカネなんて信じられないよ。というか言えない。それでレベルアップしたことも言えない。

「私はおろか我が祖先イザナギが生まれる前の時代、ウガヤフキアエズ王朝時代のものを何故、いやどうやって手に入れた？」

ウガヤフキアエズ王朝。ヒヒイロカネが存在した時代のことだけどさっぱりわからない。一応前世で調べてみたけど王様の名前がやたら長ったらしく覚える気にもなれない。そのくらい謎に包まれた王朝。

私個人の見解では月の民の先祖の王朝がそれなんじゃないかと思ってる。その王朝にありふれた物だったヒヒイロカネが存在しない理由は月の民が地上の穢れを無くす為にヒヒイロカネを消して、穢れを消したんじゃないかな？　あくまでも私の推測だから真相は本人達に聞くしかなさそう。

「適当に歩いていたら見つけた」
「どこだ!?　どの辺を歩いていたのだ!?」
「美濃のあたり」
　ちなみに美濃は岐阜県あたりのことを指していて、小学校の教科書に載る信長が稲葉山城を岐阜城に変えたことが由来で岐阜となった。
「美濃……覚妖怪の住処付近にあったと言うわけか。なるほどな。覚妖怪はこれを隠していたのか」
「えーと、神様。一応言わせて貰うけど覚妖怪が隠していた訳じゃないわ。私がこれを手にした他の覚妖怪が見た時の反応が淡白だったもん。それにそんなお宝があるなら盗賊紛いのことをしないよ」
「そうか。ならば……!」
　神奈子が弾幕を放ち、私に攻撃しよう時したけどあっさりと避けられてしまう。
「動くな!」
「不意討ちする神様の言うことを聞く筋合いはなーい!」
　その言葉を聞いて手を休める神奈子。だけどその手は震えていた。
「殺してでも奪い取る」

元ネタ知っているの!?　そのネタが出るのって千年以上も後のことだよ!?
「それなら……!」
避けて避けて避けまくるしかないよね！

一時間後、全力で弾幕を撃ちまくったせいで神奈子は逃げ馬が逃げ損なったかのようにバテバテのヘロヘロ。後ろに差し馬がいたら間違いなく差されていた。
「大人しく、渡せ……」
「神様、そのやり方だと人間から嫌われるよ。強引に奪うのは神様の仕事じゃなくて妖怪の仕事だし」
というか強盗そのものなんだけど。
「う……」
「まず事情を話してよ。神様って元々信者と取引する立場なんだから」
「……何となくという訳ではない。ヒヒイロカネはウガヤフキアエズ王朝時代の遺産だ。もう二度と手にすることはない。金銀財宝に価値があるのは希少だからだが、金銀財宝はまだ山から掘り出される。それよりも更に希少なヒヒイロカネに価値があるのは当然のことだよ。私が欲しがるのはそういうことだ」

「でもさ、信仰心を集めるならいらないよね」
「逆よ。そういう昔のものを持っているということは由緒正しい神として崇めるようになる。だから必要なんだ」

「もうその辺にしときなよ」
　現れたのはＺＵＮ帽子のロリ……もとい、幼さを残した少女。その正体を知っているけど推測だけで言うのは良くないよね。
「諏訪子……」
「こんにちは、はじめまして。私は洩矢諏訪子（もりやすわこ）、この神社のもう一神だよ」
　予想通り、その少女は私の前世である古石の知識にあった人物、洩矢諏訪子。前世の元ネタではマーラー……要するに男性器の見た目をした神様なんだけど、この神様は違う。金髪ロリの美少女……うん、頭痛が痛いというのとおんなじこと言っちゃった。
「古明地こいしだよー。よろしく」
　ケロちゃんにフレンドリーに返すと加奈子が項垂れていた。
「始めからそうすればよかった……」
　それはごもっともで。

「それでこいし、お前はここに何しに来たのだ？」
「そうそう、ある人の行方を尋ねに来たの！」
「ほう……」
「いつまで格好つけているのさ、神奈子。言っておくけどあんたの尊厳は強盗しようとした時点で失っているんだよ」
「うっ……」
「しかも勝って奪えたならともかく散々に負けた。もはや誰がどうみてもみっともないよ」
「……それでもせめてもの面子というのが――」
「あると思う？」
「……ない」
「じゃあ砕けた話し方でいいじゃん。私と一対一で話すときみたいにさ」
「……それもそうだね。という訳で改めて自己紹介しよう。八坂神奈子だ」
「古明地こいしだよ。よろしく」
　互いに握手して自己紹介を終えると神奈子が口を開いた。
「尋ね人、聖姉弟の行方についてだがさっきも言った通り西に向かっていったとしかい

いようがないんだ。それくらいしか私から話せることはない」
「でもそれだと神奈子の非を詫びるものとしては少ないよね？」
「そこなのよね……かといってそれ以上の物となると……あ、あれがあった」
「何々？　何貰えるの？」
「つい最近、天皇家に後継者となる子供が産まれるらしい」
　西暦９２１年から９２５年の間に天皇となる後継者となる子供が産まれるって……朱雀天皇？　ってことは今は西暦９２３年ってこと？
「へえ……」
「神奈子、そんな情報どうでも良いでしょ？　それよりも加護を与えるとかそういう選択があると思うんだけど？」
「……それだ。よし、こいし。お前に私の加護を与えよう。こいしに風の加護あれ！」
　そういって神奈子がゴッドパワーを使い、風の加護を与えると頭の中でバギ系の呪文が思い浮かんだ。もしかして本当に加護が来たの？
「うん、確かな手応えありだ。これで何とか釣り合いが取れたはずだ」
「いやいやそれだけじゃ足りないはずだよ。ここは私の加護も――」
「や、遠慮するよ」
「……どうしてえぇぇっ!?」

露骨な差別を受けたことに諏訪子が泣きながら腰にしがみつく。
「呪い系とか毒系は間に合っているんで」
はぐれメタルは作品によってはどっちも耐性がついていたはずだよ。
「ちくしょーっ！　こうなったら何が何でも加護を与えてやるぅぅぅっ！　こいしに我の加護あれ！」
諏訪子がそう言い放ち、私に加護を与えるとジバ系の呪文が思い浮かんだ。土着神だからかな？
「ふぅ……なんとか出来たようだね」
「意外……呪いとか毒とかじゃなく土系統の技が頭の中に思い浮かんだ」
「私のことをなんだと思っているの？」
「祟り神」
だって神奈子が守矢を完全に奪えなかったのって地元民が諏訪子の祟りを恐れるあまり出来なかったんだよ。呪いの神とかって普通に思うじゃん。
「まあ仕方ないか……それじゃその聖姉弟に会いにいきなよ。これ以上ここにいてもやることないんじゃない？」
「うん。それもそうだね、ありがとうね神様達」
「ばいばーい！」

「また会おう」

こうして私は二柱と別れを告げ、聖姉弟のいる西へ向かった。